

Tennyson の Christianity について

中 村 貢

1

Tennyson の生涯に終世離れなかったものは Immortality に対する確信であった。彼にとって Immortality はキリスト教の中心問題として牧師の家庭に成長した彼としては、おそらく幼少の頃から頭脳にきざみ込まれた言葉であったことは想像にかたくない。Cambridge 大学時代(1828—1830)に Apostles のメンバーとして仲間達と論じた問題も屢々宗教問題であり、彼が発表のため書いた覚え書からも彼が宗教的な、乃至は神秘的な事柄に対する関心の程が察せられる。⁽¹⁾最初この思想が詩に現はれたのは *The Two Voices* (1842) であるが、この詩に於ては Wordsworth の *Intimations of Immortality* や *The Tables Turned* の影響と思はれるものが多く見られ、彼自身の確信としては充分ではない。親友 Arthur Hallam の急死(1833)がこの問題をより深刻に考える原因となったことは言うまでもないが、1832年から約10年に渉る沈黙の時代とも考えられる時期の様々な心の悩みと思索を通じて彼の信念は徐々に強くなり、その絶えざる刺戟によって *In Memoriam* の製作が続けられた。1846年より1850年の頃彼は London の St. James' Square の自室で友人と談論している姿を、“Here my father, pipe in mouth, discoursed to his friends more unconstrainedly than anywhere else on men and things and what death means. When the talk was on religious questions, which was not often, he spoke confidently of a future existence.”⁽²⁾と伝えられている。

Immortality は Tennyson にとって彼の人生観の基礎であるばかりでなく、全ての人間の存在理由となるべきものであり、その信念の上に真の善、幸福、人間の尊厳等が可能となるのである。*Despair* に於て彼は神と死後の生命に対する確信を失った老人夫婦の不幸を描き、更に *Vastness* (II,33-36) に於て

What is it all, if we all of us end but in being our own corpse-coffins at last,
Swallowed in Vastness, lost in Science, drown'd in the deeps of a meaningless
past?

What but a murmur of gnats in the gloom, or a moment's anger of bees in
their hive?—

× × × ×

Peace, let it be! for I love him, and love him for ever: the dead are not
dead but alive.

と結んでいるが、この詩の内容に関して度々彼は “If you allow a God, and God allows this strong instinct and universal yearning for another life, surely that is in a measure a presumption of its truth. We cannot give up the mighty hopes that

make us men.”⁽³⁾ とその確信を表明したという。

こうした彼の執心はどこから来たのか。勿論 Hallam の死が彼を刺戟し、10数年の長期に渉る *In Memoriam* の詩作によって彼の心に密着してしまった自然の成りゆきが一番大きい原因とは思うが、この密着を可能ならしめた背後には彼の生来の冥想的な、時には劇しい melancholia に襲はれる程の孤独な性格に起因している事も察せられる。彼が度々経験したという trance の状態に於ける故人の靈魂との交流という神秘的な事柄も、彼の確信を愈々深めた重要な原因の一つと考えられる。彼の友人 Rev. B. Jowett が Tennyson 夫人への手紙の中に “I wish Mr. Tennyson could be persuaded to put the ‘Dogma of Immortality’ to verse, not the fanciful hope of Immortality from ‘recollection of childhood,’ nor the conception of a future life derived from imagery of Scripture such as are common in devotional poetry, but an heroic measure suited to manly minds embodying the deep ethical feeling which convinces us that the end of the Maker, though dark, is not here. I believe such a poem might be a possession for the world and better than ten thousand sermons.”⁽⁴⁾ と述べているところからも Immortality と彼とのつながりの一端を知ることが出来る。又彼は Carlyle が晩年 Immortality について確信を持っていなかったことを語り、且て London の coffee-house で Carlyle に会い談たまたま不死のことになると “Eh! old Jewish rags. You must clear your mind of all that. Why should we expect a hereafter?”⁽⁵⁾ と語ったといっている。これは Carlyle の思想的な成長脱皮と、Tennyson の思想の不変との対照を示すものとして興味がある。一般的に言はれるように、Victorian Age は科学進歩、産業振興の時代であり、経験主義、合理主義が栄え、宗教については John Keble, Henry Newman 等を leader とする Oxford Movement が多少の波瀾を起したとはいえ、Protestant の運動は既にその最盛期を過ぎ、Anglican Church は依然保守主義の伝統の中にとちこもって mannerism に墮し、一般大衆の信仰と思想を導くだけの力に乏しく、永遠の生命といったキリスト教の最も本質的な問題についても教会は教養ある人々に対して充分の説得力をもち得なかった。従って彼が新しい詩の中で力強く不死の生命を歌い出したとき、それはたしかに人心を動かし、訴えるだけの魅力のあったことは当然であった。

しかし彼のこうした信念は感受性の強い芸術家としての性格から生まれたのであり、深い宗教的体験や、哲学的思索や、神学的研究の成果ではない。Paul F. Baum が His mind had not been disciplined with a severe application to logical thought and speculation. He was not deeply read in the best that philosophy and religion had on special subject, though he read widely.⁽⁶⁾ と言っているのは必ずしも Tennyson に対する酷評とばかりは言うことは出来ないであろう。

彼の Immortality に対する信念は、愛の神に対する素朴な絶対的信頼から発したものであり、神が愛であり、永遠である限り、その神の支配の下に生きている人間、いな万物は永遠に滅びることはあり得ない。特に人間には free will が与えられており、この free will は人間の本質であり、人間はこの本質によって聖なる神と質を同じくするものとされている。従ってわれわれの肉体は滅びても、本質なる free will は滅びず、永遠に存続すると確信するのである。これは「キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不死とを明かに示されたのである」⁽⁷⁾との聖書の言葉に基くものであり、このことがキリスト教の cardinal point であることは彼が繰り返して述べるところである。

2

しかし注意しなければならぬことは、Immortality といってもその意味は必ずしも一様でないことであり、特にギリシヤ的なものと、キリスト教的なものとの間には著しい相異がある。元来 Immortality はギリシヤ語の *athanasia* から来たものであり、ソクラテスとの対話篇中のパイドン⁽⁸¹⁾によれば人間は靈魂と肉体とよりなり、靈魂は真理探永のため絶えず努力しているが、肉体の欲望はそれを妨げている。従って肉体が減びることによって靈魂は自由を得、常に求めていた智恵に到達することが出来ると説き、更に生者より死者を生じ、死者より生者を生じるのであり、この状態は円環状をなして繰返される。故に靈魂は肉体が減びることによってヘーデスに赴くが、暫くの後再び肉体を得て生者としてこの世に生れて来ると説いている。

これに対してキリスト教に於て不死は Immortality よりもむしろ Eternal life 又は Kingdom of God なる語で示されている。その内容は終末的なものであり、その本来の意味は「永遠である世界または時代に於ける生命」の意である⁽⁸²⁾。これは English Bible 中 St. John の福音書に於ては Eternal life なる語をもって示されているが、他の福音書 (Mathew, Mark, Luke) に於ては Kingdom of God 又は Heaven という語で示されている。*athanasia* が Immortality と訳されて English Bible に見られるのは Paul の書翰に於てのみであるが、聖書に見られる Immortality は Paul が用いた限りに於て Eternal life と差別はないものと考えられる。

キリスト教でいう Kingdom of God とは、父なる神がその主権をもって支配する世界であり、この世界に於ては、生命は時間的制約を越え、全てのけがれ、全ての罪から解放された永遠的な生命となる。イエス・キリストが十字架の死によって人間に与えた生命はこの世の朽ちて行く、罪に満ちた生命ではなく、神の子としての生命であり、神が支配する今ひとつの来るべき世界又は時代に属するところの生命であり、この生命は人間がイエス・キリストを信じることによって与えられるが、彼を信じないものには与えられず、永遠の滅びに渡されるとされている。

Tennyson の思想中にある Immortality がギリシヤ的なものであるよりも、多分にキリスト教的なものであることは明かであるが、果して正当なキリスト教の教義によるものであるか否かは疑問である。*In Memoriam* のはじめの部分では、彼は死をおそるべきもの、不可解なものとして可⁽⁸³⁾り扱い、その死が友を自分の行くことの出来ない未知の世界につれ去ったことを嘆いている。次にこの死が人生の秘密を解く鍵をもっているものと考え、それを追ってさまよい歩くが結局その目的を果すことが出来ない⁽⁸⁴⁾。しかしこのような人生に対する懷疑の状態を経て、遂に如何なる月日の経過も、輕薄な人間の言葉をも排して神の愛の亡びないことを証明しようとの努力を続け、もし死の後に真の生命がなく、愛もまた死と同時に亡んでしまうものならば人生に何の価値があるかと考えつつ、遂に永遠の生命を信ぜざるを得ない境地にまで導かれる⁽⁸⁵⁾。

しかし Tennyson にとっての不満は Immortality が如何なる状態に於て与えられるのか、この点について知り得ないというところにある。彼はこのことを「もしラザロ⁽⁸⁶⁾が死んでよみがえるまでの四日間の状況を述べた記録があったなら、キリストは更にあがめられたであろう⁽⁸⁷⁾」と述べている。

しかし死後の状態に関しては如何ともあれ、彼の Immortality に対する信念は確固不

抜とも言うべき強さにまで成長をとげているのである。彼は現世より離れた後の状態としては、おおよそ次の三つを想定している。

1. 死後直に神の国に入り Eternal life を受ける。

この思想に関して Bradley は “The idea that thereupon the soul passes at once to a final state of bliss or woe is, on the whole, foreign to the poet, and is repudiated (in *The Ring*).⁽¹⁷⁾” といっているが、必ずしも全体的に否定していると考えるべきでないことは *In Memoriam* の Prologue⁽¹⁸⁾ に於て

I trust he lives in thee, and there

I find him worthier to be loved.

や、彼の耳に囁く Hallam⁽¹⁹⁾ 言葉

‘Tis hard for thee to fathom this;

I triumph in conclusive bliss,

And that serene result of all.

などから考えてみるならば、Hallam のようなすぐれた人物の場合には、死後直に至福の状態に入ることがあり得ると想像していることは否定出来ない。彼の友人の妻 Charlotte Locker の死に対する弔慰の手紙の一節 “Sure at least I am that, even in this first anguish of grief, you can think with thankfulness that the weary days of suffering are over with your dearest one, and can trust that she is happy now with God and Saviour she has loved and served”⁽²⁰⁾ は Tennyson のような人物にとって、友を慰めるための一片の辞令と考えることは出来ない。

2. 死後靈魂がある時期まで眠り、世の終りの日に一齐に目覚めること。

この思想に関して彼は「もし死の直後の状態が眠りであるなら、地上に於ける記憶はそのまま眠りという花卉の中に包まれ、全ての人々の靈魂がよみがえる時には地上の記憶も愛情もよみがえるべきこと⁽²¹⁾」を歌っている。これに関して Bradley は “It is observable that in Tennyson’s abstract of this section the notion of a general re-awakening disappears.⁽²²⁾” として彼に於けるこの考えを否定している。しかしこの思想は聖書に於て明かに示され、埋葬式には必ず読まれるべき信仰⁽²³⁾であり、おそらく一般大衆の信仰としては、最も常識的なものと考えられていた時代であり、彼にとっても幼時から親しんでいた教義の一つであったであろう。Bradley が general re-awakening が消滅しているという Tennyson の abstract 中の…… and in that case the memory of our love would last as true …… within the spirit of my friend until after it was unfolded at the breaking of the morn, when the sleeping was over.⁽²⁴⁾ の中には果して general re-awakening の思想が消滅しているか明かではない。

3. 現世と靈魂の最後に行きつく神の国との間に幾多の階層を設ける。

これは Tennyson にとって最も屢々出て来る特長的な思想である。彼によれば神の国に入るためには、現世での訓練だけでは不充分であり、靈魂が神の国に住むに価するようになるまでには、幾度も生れがかわり、幾多の世界に住むことによって磨かれ高められなければならないと考える。De Profundis の

……and still depart

From death to death through life to life, and find

Nearer and ever nearer Him who wrought

Not matter, nor the finite infinite,
But this main-miracle, that thou art thou,
With power on thine own act and on the world.⁽⁸⁸⁾

に明かに見られる、このようにして幾多の世界を遍歴した後、最後に於て神に同化することを、

Upon the last and sharpest height,
Before the spirits fade away,
Some landing-place, to clasp and say,
“Farewell! We lose ourselves in light.”⁽⁸⁹⁾

と歌っているが、彼はこのところで Hallam と共に同じ世界を遍歴して一緒に光と化すといっているのは単なる詩的想像であって幾多の矛盾を含んでいる。

彼は息子 Hallam に語って人間の自由意志は鳥籠中の鳥のようなものであり、高いところにも、低いところにも止まることが出来る。人間は鳥のために漸次鳥籠を拡大し、鳥はより高い止り木にとまりつつ、遂にはその頂上が破られ、空中に舞上がることが出来るように、われわれの靈魂も遂には宇宙の自由意志と一致することが出来るであろうと述べ、更に “If the absorption into the divine in the after-life be the creed of some, let them at all events allow us many existences of individuality before this absorption; since, this short-lived individuality seems to be but too short a preparation for so mighty a union.”⁽⁹⁰⁾ と語っている。

こうした Tennyson の生れかわりの思想はどこから来たものであろうか。キリスト教の歴史に於ては、この考えはすくなくとも正常ではない。三世紀のオリゲネスの靈魂先在説にはこれに近い思想があるとされているが、アウグスティノスはこの思想をはげしく攻撃し、リヨン (1274) およびフィレンツェ (1439) に於ける教会々議では共にこれを異端思想として排除したということから見れば、キリスト教の中にも、こうした思想を許す多少の根拠があるように思はれる。しかし Tennyson がキリスト教の歴史から直接影響を受けたと考え得る根拠はない。又前述のバイドンに示されたギリシヤ的な Immortality の思想に類似する点なしとはしないが、バイドンに於ては人間は死によって肉体は滅び靈魂はヘーデスと現世との間を往復し、この循環を限りなく繰り返すのに対し、彼に於ては靈魂は生れかわる度毎に次第に進歩向上し、浄化されて、終局的には神の国に入るのである。即ち前者に於ては生は連環状をなして限りなく連続するのであり後者に於ては羅旋形に上昇し遂には神と一体化するのである。又前者に於ては生れる場所は常に地上であるが、後者に於ては地上ならぬ他の世界と考えられるが、この点に於て Tennyson の考えは必ずしも明確ではない。Memoir によれば彼は1871年にバイドンを読んだことが記されているが、彼の思想はそれよりはるか以前に作られたものであり、たとえそれ以前に彼がギリシヤの生死観に接したとしても、彼が直接の影響を蒙ったかどうかは疑はしい。

又彼の生れかわりの思想は仏教の輪廻思想との類似も考えられる。しかし法華經方便品の「以_二諸欲因縁_一 墜墮_二三惡道_一 輪廻_二六趣中_一 備受_二諸苦毒_一」や心地觀經三の「有情輪廻生_二六道_一 猶如_三車輪無_二終始_一」等より見れば仏教に於ける輪廻は惡業の結果として与えられる刑罰と考えられ、たとえそこに救済の道があるとしても、Tennyson の万人救済のため、靈魂の進化向上を目的とした生れかわりとは同一視することは出来ない。なお彼が東洋思想イスラム思想に興味を覚え、東洋の哲人や、イスラム經典を愛読したの

は晩年である。彼が1883年に友人 Sir Arthur Gordon と Pembroke Castle へ旅行の途中、彼は Gordon に Nirwana についていろいろ質問し、“I understand that the Buddhists hold their end to be a negation of the known, which equals, according to them, a positive apprehension of the unknown.” と彼の考えを述べ、更に The soul is like a cork in a bucket of water rising through the different strata, until at last it reaches the top and is at rest” と述べている。これは前述の鳥と鳥籠の比喩と内容に於て同一である。彼は Nirwana と神の国との比較に対して興味を覚えたこととは思いますが、直接仏教思想の影響は考えられない。

3

死後の靈魂が神と合一するまでの過程がいづれにあるにせよ、彼が死後の靈魂に対して想像していた特質を列挙するならば、次のような分類が可能である。

1. 来世に於ても個の意識は消えない。

このことは以下に列挙される状態の前提条件ともいうべきものであり、Immortality と言う限りそれは個の Immortality でなければならないことは当然である。彼は更に現世に於ける個人の性格もまた死後の世界へ持ち越されるであろうことに関して “I may say that I think I can see as far as one can in this twilight, that the nobler nature does not pass from its individuality when it passes out of this one life.” と述べている。nobler nature が死後にまで送られて行くというのはおそらくこうした性質が将来一層磨かれて神の国へ入る機縁となることを暗示しているのであろう。

2. 現世に関する記憶が来世にまで持ち越される。

このことに関しては、死後の眠りの項でも述べたが、彼は更に、

And in the long harmonious years

(If Death so taste Lethean springs),

May some dim touch of earthly things

Surprise thee ranging with thy peers.

と歌って死後の長く楽しい期間に、ふと地上での生活の記憶が呼び起こされるであらうことを示しているが、生れかわりの場合、その記憶が死の直後のみのことか、幾世代に涉つてものであるかは、これ以下の場合と同様明かではない。

3. 地上での交りを死後に於ても続けることが出来る。

自分が死んだあと、友は先輩として自分を訓練してより豊かな成長に導いてくれるであらうことを、

And so may Place retain us still,

And he the much beloved again,

A lord of larger experience, train

To riper growth the mind and will:

と歌っているが、更に生れかわりの項で引用したように、二人は神と合一する最直前まで共に住むことを想像している。死後神の国に於て再び相会して、更に別離の悲しみを味うことの無いことは、聖書に基く信仰であり、キリスト教徒のみならず、仏教徒に於ても素朴な願望であり、彼はこうした一般に共通する人間の期待を述べたのであろう。

4. 死後の世界から地上を眺めることが出来る。

死者は来世に於て他の靈魂と親しく交わる一方、地上に思いをはせながら、地上を眺め、過去の交わりをなつかしむことが出来ると考える。これも彼が亡友を想うのあまり発した詠嘆の一つであろう。

5. 死者の靈魂は現世に戻って生者の靈魂と交わることが出来る。

前述のように彼は少年時代よりの経験として屢々目覚めたまま一種の恍惚状態に入ることが出来、その時には彼の個性は強い自覚から解放されて無限界に没入することを感じた。彼によれば、それは決して精神の混乱状態に於てではなく、非常にはっきりした精神状態であり、彼はそれによって死の限界を越え、小我を滅して大我に没入することを自覚した。彼は “……there might be a more intimate communion than we could dream of between the living and the dead, at all events for a time.” と述べている。彼が独り庭園にいと、こうした恍惚が彼を襲い、その状態に於て Hallam と交わることが出来たことを、

The dead man touch'd me from the past,
And all at once it seem'd at last
The living soul was flash'd on mine,

及びそれ以下で歌い、更にこうした霊と霊との交流に関して、

No visual shade of some one lost,
But he, the spirit himself may come
Where all the nerve of sense is numb;
Spirit to Spirit, Ghost to Ghost.

と歌っている。このことは彼の非常に神秘的な体験に基いた思想であるが以上1から4までが彼の想像乃至は念願であることに対して、このことは彼の体験であるだけに、実感として確信をもっていたと考えられる。

6. 死後の世界には絶えざる向上と進歩がある。

死後の靈魂が益々向上進歩して地上の人間との間隔を大きくして行くことを、

But thou art turn'd to something strange,
And I have lost the links that bound
Thy change here upon the ground,
No more partaker of thy change.

と歌っている。彼によればそれぞれの段階では肉体が与えられるが、それらは次々と蛹の殻のように滅び去り、靈魂はその度毎に浄化されて行くのである。従って彼にあっては、現在を含めて各階層の世界の生の意義は究極に於て神の国に入るための準備である。

7. 究極に於ての神との合一。

彼にとって God は超越神ではなく、人間の靈魂は God と同質のものであり、その神はまた宇宙に充滿し万物の中に遍在する。人間の靈魂は究極に於てこの宇宙の霊と合一するのであり、この点に於て彼の神観は汎神論的である。この状態に就て、彼は前述の如く “We lose ourselves in light” といつてこの最後の段階に於て個の消滅を示しているが、これは単なる個の消滅ではなく、所謂小我を滅して大我に生きるものであり、この段階に於てこそ個は完成したと考えられる。

Thy voice is on the rolling air;
I hear thee where the waters run;

Thou standest in the rising sun,
And in the setting thou art fair.

によってはじまる歌に於て彼は神と合一した友が、大我の中に於て、なお自己を示すことが出来ることを示し、これによって彼は全ての人類が死後到達することの出来る神の救いを歌うと共に、“Way of the Soul”と彼自身が述べたように、彼は Hallam の死によって彼自身の靈魂の成長をも遂げることが出来た。

4

現世の意義が来世への準備であるという彼の人生観に就ては、既に述べた通りであるが、彼は又人類は現世に於ても更に向上進歩すべきものであることを *Maud* に於て、

As nine months go to the shaping an infant ripe for his birth,
So many a million of ages have gone to the making of man:
He now is first, but is he the last? is he not too bese?

と歌っているが、彼のそれに対する答えは “No, mankind is as yet one of the lowest rungs of the ladder, although every man has and has had from everlasting his true and perfect being in the Divine Consciousness.” と答えることを常としたと述べられている。このような現世に於ても、来世に於ても、絶えざる進歩向上が存在の根底にあるとの思想は終世変ることがなかったが、Darwin の進化論は彼に一層の確信を与えたようである。Darwin が *The Origin of Species* を発表して、当時の思想界宗教界に一大センセーションを引き起こしたのは1859年であるが、彼はその年の11月にこれを読み、非常な興味と共感を覚えた。Darwin は1868年に Farringford の Tennyson 邸を訪れたが、その時 Tennyson は Darwin に “Your Theory of Evolution does not make against Christianity.” と述べ Darwin は “No, certainly not.” と答えた。Tennyson の信仰は Darwin の進化論によって愈々強化されたと見るべきであろう。

人生は神を源とした流れであり、人間の自由意志は神に通じるものである故、自由意志が昂揚されるに従って、美に対する感覚は強く、善に対する意志は愈々固く、真理探求の智慧は愈々深くなる。何故なれば真善美は全て神より発したものであり、その神の愛によって人間相互の愛の実践が可能となる。

That Beauty, Good and Knowledge are three sisters
That doat upon each other, friends to man,
Living together under the same roof,
And never can be sunder'd without tears.
And he that shuts Love out, in turn shall be
Shut out from Love, and on her threshold lie
Howling in outer darkness.

この思想は終世変ることのなかった彼の信念であり、彼の人生観が如何に彼の宗教的信仰に根ざしているかを示している。

Darwin の theory を素直に受け入れることの出来た彼の信仰は Catholic や Anglican Church に見られる保守的な dogma や form に拘束されていないことは勿論であるが、又同時に Calvin や Wesley によって代表される Protestant の鋭い罪悪感や厳しい人間観に基く救いの体験などが見られないこともまた当然と言えよう。彼にあって神とは永遠

の真理としての神、宇宙の霊力としての神、愛によって全てを創造し、愛によって全てを支配する神、その愛の最高の表現としてイエス・キリストを人類に送りし神、そして全人類を神の国に摂取する神である。その存在は人間の智慧を越え、唯人間はその不可思議な存在を信ずる以外に道はないのである。彼は神について “That Love which is and was my Father and my Brother and my God.” と呼んでいる。My Father は聖書に示された呼称であるが my Brother と呼んでいることは人間が神と同一の本質を持っているとの彼の信念の現われであり、汎神論的な彼の考え方の一表現であろう。彼は祈りについてそれは無限なる神の霊と合一することであり、たとえば小さい掘割りの水門のせき止めを取りはずして外から大海の水を満々とその掘り割りに満すことであると言ひ、従って自分の区々たる欲求を祈りとすることは本末転倒であり、自分を昂揚して神の意志に合致することこそ、真の祈りと考えていた。“O Thou Infinite, Amen.”⁽⁴⁹⁾ という句が屢々祈りとして用いられたのは彼の以上の考えの結果である。これはイエス・キリストのゲッセマネの祈りと相通ずるものがある。

彼が *The Higher Pantheism* に於て「万象は神の vision であるが人間の五感はその真実を捉えることは出来ない。もし人間の感覚が一層鋭敏になったなら、おそらく神自身の姿を見ることが出来よう」と述べ、又1869年に Switzerland への旅に出たとき、Alps の連峰を眺めながら “……perhaps this earth and all that is on it—storms, mountains, cataracts, the sun and the skies—are the Almighty: In fact, that such is our pretty nature, we cannot see Him, but we see His shadow, as it were, a distorted shadow—”⁽⁵⁰⁾ といった言葉の中にも Pantheist としての彼を見ることが出来る。ただ彼にとって神は、かく宇宙に遍在している霊であると同時に、愛の神であり、イエス・キリストの中に人格神として顕現し、常に世界の中に愛の力として働いているとの信仰が彼を支えているのであり、この点に於て彼は単なる Pantheist 以上であると言わねばならぬ。

この世界が神によって創られ、一元的に神によって支配せられている限り、善も悪も一様に神の摂理の中にあり、そして神が愛である限り、人類への刑罰としての Eternal Hell はあり得ない。罪も徳行も神の前には平等であり、如何なる功績も神に届き得ないのである。⁽⁵¹⁾ この点パウロの「人間が神の前に義とせられるのは行いの方則によらず唯神への信仰による」と言った言葉と共通している。ただ Tennyson にあってはパウロ程の深い宗教体験を通して到達した信仰ではなく、むしろ Pantheistic な思想と素朴な愛の神に対する信仰との発展として当然生れざるを得なかった結論であり Baum が彼を評して “He was not really a Christian, though Stopford Brooke tried vainly to prove that he was. He felt no profound faith which was wrested from him by Hallam's death—at least I find no evidence of it either in the biography or in the poem.”⁽⁵²⁾ との評はすくなくとも従来 of 伝統の上に立った Christian の category に入りきらぬ多くのものが Tennyson にあることを示している。しかしながら彼が、

So fret not, like an idle girl,

That life is dash'd with flecks of sin.

Abide: thy wealth is gather'd in

When Time hath sunder'd shell from pearl.⁽⁵³⁾

と歌って罪の怖ろしさを並べて人々の心に恐怖感や絶望感を与える宗教人に対して一般民衆をかばい、

Oh yet we trust that somehow good
Will be the final goal of ill,
To pangs of nature, sins of will,
Defects of doubt, and taint of blood.

と、あらゆる悪も最後には善に帰着するというあくまで肯定的、楽観的人生観を示して人々の心に安心と希望を与える大胆な思想は、区々たる教義を超えて人々の心を打ったことは当然のことと考えられる。当時有名な宗教人 Rev. Frederick Maurice は *In Memoriam* を読んで感動し、彼に自著 *Theological Essay* を贈り “I have maintained in these Essays that a Theology which does not correspond to the deepest thoughts and feelings of human beings cannot be a true Theology. Your writings have taught me to enter into many of these thoughts and feelings.” と讃えたこと、また、有名な説教家 Frederick Robertson が *In Memoriam* に関して “To my mind and heart most satisfactory things that have been said on the future state are contained in the *In Memoriam*.” と言って当時の非難に対して彼を弁護したことなどより察するに、mannerism に陥った当時の宗教界は彼の思想の Pantheistic な傾向にも拘らず、啓発されるところが大であったと思う。彼の有名な “Ring in the Christ that is to be.” は将来のキリスト教が従来のは殻を破って新しく発足すべきであるとの提唱であり、彼の Christianity の立場を明かにしたものである。

この思想はまた当然の process として、彼を Universalist としている。キリスト教に於て Universal Salvation の思想は、既に2世紀の中頃からはじまり 500 A. D. 頃まで東方教会は総じてこの思想に傾いており、宗教改革時代より現代までに及ぶ宗教上の思想であるが Catholic, Protestant を通じて伝統的な教派に於てはむしろ排撃せられている。しかし Tennyson に於けるこの思想はこれらの歴史的な教義の影響を受けたというよりは、彼の個性的なキリスト教信仰の当然の帰結であり、彼の性格的な鋭い詩人的感受性がその原因をなしていると考えべきではなかろうか。しかし彼の Christianity はこうした従来 of 伝統的なキリスト教自体の拡大脱皮に止まらず、更に全世界に於ける全ての宗教は一樣に同じ神を求めているのであり、同じ神を讃美していることを述べ、全ての宗教は一つとなるべきことを主張した。こうした思想を歌った *Akbar's Dream* は特に保守的で自尊心の強い当時の英国社会に対してはあまりにも radical な、贖神的な提唱であったであろう。1869年に彼の主唱によって結成された Metaphysical Society もその目的とするところは Christianity の前進であったことは疑うことは出来ない。この Society には Anglican Church, Roman Catholic や Unitarian を含む Protestant の各派のみならず、キリスト教に反対の思想をもった人々をも含めた集りであり、将来の宗教の問題等について広い討議がなされたという。この Society は当時の有名な智識人、宗教人を集め1880年まで約十年間続いたのであるが、遂に思想界にも宗教界にも勢力となることなしに終わった。しかしこの思想と熱情が彼にとって終生変らないものであったことは1890年の記録として Master of Balliol が彼に “All religions are one” なる詩想の下に作詩する事をすすめたところからも察せられる。

キリスト教の諸派の一致のみならず、広く世界全体の宗教が一つの神の下にあるとの認識の下にその一致を進めようとした Metaphysical Society は遂に解散の止むなきに至ったが、こうした一大 Vision の上に立った運動の意義は重要である。今世紀の後半になっ

て漸く起って来た Ecumenical Movement は従来ともすれば相争い、相反目しつつ自己を守ろうとしていた世界に於けるキリスト教会が、イエス・キリストによる一致を目指して起こした一大運動であり、その精神は高く評価されてはいるが、運動は漸く緒についたばかりであり、運動自体が目指す目的の達成には程遠いものがある。Akbar's Dream に於て彼が念願とした世界の宗教が一致するという夢の実現は如何に困難なことであろうか。現在東南アジアに於ける、また中東に於ける、また南アフリカに於ける根強い紛争は、表面は政治的なものであれ、経済的なものであれ、それ等の背後にある宗教的差別や偏見が如何に大きく相互の理解を妨げ、敵愾心をあほり、紛争を底知れぬ奈落の淵に引き込もうとしているかを思うとき、Tennyson の単純素朴であり、しかも敬虔さに満ち、人間性に深く根ざした Christianity を再検討する必要があるのではなかろうか。

註

- (1) Hallam Lord Tennyson, *Tennyson A Memoir*, (Macmillan Co. 1879) Vol. I, p. 43, 497.
- (2) *Ibid.*, Vol. I, p. 263.
- (3) *Ibid.*, Vol. I, p. 321.
- (4) *Ibid.*, Vol. I, p. 433.
- (5) *Ibid.*, Vol. II, p. 410.
- (6) Paul F. Baum, *Tennyson Sixty Years After* (Archon Books 1963), p. 131.
- (7) *Bible*, II Timothy, I 10.
- (8) プラトン名著集パイドン (新潮社) 参照
- (9) キリスト教大事典 (教文館) 参照
- (10) *Bible*, Romans, II 7, I Corinthians, XV 53-4, I Timothy VI 16.
- (11) キリスト教大事典 (前出) 参照
- (12) *In Memoriam*, XXII, iii-v.
- (13) *Ibid.*, XXIII, i-ii.
- (14) *Ibid.*, XXVI, i, iii-iv.
- (15) *Bible*, John, XI 17-44.
- (16) *In Memoriam*, XXXI.
- (17) A. C. Bradley, *A Commentary on Tennyson's In Memoriam* (Macmillan 1920), p. 52.
- (18) *In Memoriam*, Prologue, x.
- (19) *Ibid.*, LXXXV, xxiii.
- (20) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 113.
- (21) *In Memoriam*, XLIII, i-iv.
- (22) A. C. Bradley, *op. cit.* p. 124.
- (23) *Bible*, I Corinthian, XV 51-3
- (24) Cf. *Common Prayer*, Burial of the Dead.
- (25) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 421.
- (26) *De Profundis*, II, 53-7.
- (27) *In Memoriam*, XLVII, iv.
- (28) *Memoir, op. cit.* Vol. I, p. 319.
- (29) キリスト教大事典 (前出) 参照
- (30) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 103.
- (31) 仏教大辞典 (織田得能著大蔵出版) 参照
- (32) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 279.
- (33) *Ibid.*, Vol. II, p. 155.
- (34) *In Memoriam*, XLIV, iii.
- (35) *Ibid.*, XL, ii.
- (36) *Ibid.*, XLVII, iv.
- (37) Cf. *Bible*. I Corinthian, XIII 12-13.
- (38) Cf. *In Memoriam*, LXI, LXIV, LXXVII, CXXVII.
- (39) *Memoir, op. cit.* Vol. I, p. 320.

- (40) *In Memoriam*, XCV, ix.
- (41) *Ibid.*, XCIII, ii.
- (42) *Ibid.*, XLVII, iv.
- (43) *Ibid.*, CXXX, i-iii.
- (44) Maud, Part I, IV, 34-36.
- (42) *Memoir, op. cit.* Vol. I, p. 324.
- (46) *Ibid.*, Vol. II, p. 57.
- (47) *To—*, with *The Palaca of Art*, 9-16.
- (48) *Memoir, op. cit.* Vol. I, p. 312.
- (49) *Ibid.*, Vol. I, p. 325.
- (50) *Bible*, Matthew, XXVI 39, Mark, IV 36, Luke, XXII 42.
- (51) Cf. *The Higher Pantheism*
- (52) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 68.
- (53) *In Memoriam*, Prologue, ix.
- (54) *Bible*, Romans, III 21.
- (55) Paul F. Baum, *op. cit.* Chap. V. p. 131
- (56) *In Memoriam*, LII, iv.
- (57) *Ibid.*, LIV, iii.
- (58) *Memoir, op. cit.* Vol. I, p. 430.
- (59) *Ibid.*, Vol. I, p. 298 (Note). also Cf. Thomas R. Lounsbury, *The Life and Time of Tennyson*, (Russel & Russel, 1962) p. 632.
- (60) *In Memoriam*, CVI, viii.
- (61) キリスト教大事典(前出)参照
- (62) Cf. *Memoir, op. cit.* Vol. II, pp. 166-170.
- (63) *Memoir, op. cit.* Vol. II, p. 372